

大学等名	文京学院大学
テーマ名	テーマ1：地域活性化への貢献
取組名称	共生社会創造を図る地域貢献活動と雇用創出
取組学部等	全学
取組担当者	平山許江（人間学部教授 保育実践研究センター長）
取組期間	平成16年度～平成18年度
Webサイト	http://www.u-bunkyo.ac.jp/gp_index.html

取組の概要

本取組は建学の精神である『共生』の理念を実現するため、本学の「保育実践研究センター」「地域連携センター」「心理臨床・福祉センター」を活動の中心に置いて、行政をはじめとした地域の関係諸機関等と緊密な連携体制を組み、その専門的諸資源を活用して、現代的教育ニーズに対応する新たな教育プログラムを教育開発したものである。実践的な課題探究型で総合的な教育を展開するとともに、地域住民の子育て、高齢者福祉・介護のニーズに対応し、インフォーマルなサービスを柔軟に提供する取組を行い、地域で異世代交流の新しいネットワークやコミュニティの形成を目指してきた。さらに、学生を含めた地域の人材を育成し、多様な世代の地域住民と学生が一体となった活動を行い、地域の活性化に貢献してきたものである。

実施の経緯・過程

平成9年に、大学の専任教員が相談を担当する「心理臨床・福祉センター」を設立し、平成16年には、学生の保育体験実習を推進する「保育実践研究センター」を開設し、続いて平成17年には、地域連携と学生のボランティア活動を推進する「地域連携センター」を開設した。3つのセンターは独立した活動をするるとともに、相互に連絡を取り合い、学生のニーズや地域のニーズに柔軟に答えたり、活動を円滑に進めるための共同作業を積極的に進めたり、弾力的な運営を図ってきた。

3つのセンターはいずれも学則に位置づけられた施設であり、全学に対して、目的、組織等の運営細則が周知されている。これによって継続的な取り組みを保障するとともに、大勢の人によって絶えず有効性や公明性が検討できるものになっている。それぞれのセンターは、専用スペースと専従スタッフを整えて、いつでも、だれでも、どんなことについても開かれているよう努力されている。

一方それぞれのセンターは、学則に規定された名称のほかに、活動が多くの人に親しまれるよう愛称もしくは通称が付けられている。保育実践研究センターの子育て事業は、「ふらっと文京」と呼ばれている。地域の子育て中の保護者が大学内の施設を気軽に利用できるように、また学生が自分の興味と関心にのっとって容易に利用できるようにと言うコンセプトから「ふらっと」と名づけられている。地域連携センターは、計画段階では、地域ボランティアセンターと仮称されていたが、その活動の主旨を明確にする過程から地域連携センターと定め、その内容を表した Bunkyo Informal & Community Service の略称の「BICS ビックス」呼ばれている。心理臨床・福祉センターは、地域の方々に対する相談業務が主であるため学生向けの愛称はないが、簡略化した「臨床センター」が通称となっている。さらに、前2者は学生の手からなるマスコット・キャラクターもデザインされている。



学生の参加および地域利用者は順次入れ替わりながらも年々増加して、活動内容も多岐に亘ってきている。大学の専門的資源を活用しての活動としては、「子育て講座」や「ホームヘルパー2級養成講座」などを実施し、地域の方々と学生とが交流しながら学習を深めた。学生の実践学習活動としては、日本語を母語としない子どもたちの勉強をサポートする「まなびの教室」事業、月一回の活動を通して地域の子どもや大学生との交流を目指す「つどいの広場事業」、障害を持った子どもとその家族との交流を図る「ピース」事業、地域の高齢者と大学生が触れ合える場を提供する「バウムクーヘン」事業を継続的に実施している。これらの活動場所は大学内に留まらず、小中学校に入り込んでボランティアを行ったり、地域の多様な機関と連携したり、広範囲に亘っている。

事業が地域に浸透するに従って新たなニーズとして、「特別支援教育」および「次世代育成支援対策推進」についての学習要求が生まれたため、小学校、保育所、幼稚園等の現任者研修を実施した。地域の現任者のほかに本学卒業生や実習先の指導教員なども参加し、まさに現代的ニーズに応えるべき努力してきた。

目的に対する成果、人材養成面での達成度

学生にとって、実践現場とかかわる経験は非常に有用である。専門知識の理論と実践の融合のほかにも、地域の多様な人々の生の声やニーズに直接触れたり、日ごろ学生は足を踏み入れることの少ない諸機関の組織や運営にかかわったりすることによって、視野を広げ、課題を深化させ、人間的成長が大きく促されてきた。特に地域の方々との協働作業は、学生の社会性を涵養するうえで大きく影響した。学生自らが、情報の収集や交渉・調整を重ねる中で、困難さを乗り越えて粘り強く目的を達成する力が育ってきた。表現は異なるものの多くの学生が、「ほう・れん・そう」の大切さを痛感したと感想を述べたり、提供する支援を一時的なものに終わらせない「継続の責任」を実感したと発言するなど、ボランティア観の形成に大いに役立った。

学生にとってこれらの活動参加は、教育課程に位置づけられていない、言ってみれば「単位にならない」活動であり、無償の「バイト代も入らない」活動である。あくまでも主体的な参加が求められている。したがって、自らの決断や行動力が問われ、安易な動機や流行では続かない。しかし一定の経験を蓄えた学生は、おしなべて自身の「人間力」の向上を実感している。人生の先輩や異業種、異年齢の方々、学生を待ち望んでくれる幼児や児童たちとの交流によって、新たな人間関係を構築する体験を得ることができた自信は大きい。また、与えられた知識だけに頼るのではなく、目的に従って自ら新しい情報を求めたり、組織の一員となったり、課題を一つひとつやり遂げる過程は、有能感や達成感をもたらし、成長を実感する機会となった。

本取組の一つである地域連携センターでは、現場の中で活躍されている民生委員、NPO 代表、行政職員等が地域委員として学生の活動のみならずセンター運営にも様々な助言をいただいている。

地域委員の声（元公民館事業係長 Nさん）

「最初の事業の時に、子ども達に対してどのような事業運営をするのだろうかとホール二階の外周廊下で観察をしてみた。学生のほとんどが、これまでに子ども会を含めての青少年指導を経験していないことは、その動きから推察することが出来た。ここで手を出すことは容易なことではあるが、それでは学生の成長は望むことが出来ない。悩むことで成長するそれが若者の特権でもある。後日、運営について少々のアドバイスを与えた。」

学生が講義の中で学んだ理論を実際に活動として実践していく際に「何をしたら良いのかわからない」という壁に直面した。特に事業運営をしている学生実行委員は、運営サイドであるため、学生ボランティアと異なる動きをしなければならぬ。例えば「つどいの広場事業」では、大学内で月一回大学生と小学生が触れ合う場の提供を行っている。全体のプログラムを運営していくときに、子どもの様子に目を向けることはもちろんのこと、学生ボランティアやプログラム全体としての動きにも目を向けなければならない。事業が立ち上がった当初は、組織としての行動よりも個人としての行動することが多く、上記地域委員の声にもあるように頼りなく思える一面もあった。しかしながら、こうした経験を自分の力へと変えていったのは日頃の定例会や、教員や地域の方々に様々なアドバイスを得たことにより、学生は「何のために活動をしているのか」と考える機会が多く得られたためである。左記の図は「つどいの広場事業」の活動にボランティアとして参加した学生の推移である。月々の推移をみると、定期試験や長期休暇も重なり多少上下はしているものの、着実に増加していることが伺える。このように、日々のボランティア活動を通して学生自身にも何らかの形で影響を及ぼしていることがわかる。幾多の困難にぶつかりながらも楽しみややりがいを見出し、学生自身の行動変容にも繋がっていることが推察できた。また参加者が新たな参加者を誘い、実践報告会や報告書が後輩や新人の勧誘を促してきた。したがって今後も、単に数の増加を図るのではなく、主体的参加の主旨を損なうことなく、こうした自らの動機に働きかける循環を推し進めていく姿勢を貫く。ささやかであっても、学生の一人ひとりの中に着実に培われる「自立と共生」の理念が、やがて総和となって大学の理念となるよう努力を積み重ねていく。

自大学の教育改革への影響、他大学等への波及効果、地域社会等への波及効果

身近なところに実践的な学習場所があることで授業展開が充実し、多様な学習を提供できるようになった。専門職を目指すうえで現場実習は重要な学習の場である。しかし、学外の実習体験は自ずと制限があるが、

本取組によって、日常的にまた柔軟に実践体験を行うことが可能になった。

最初は教師に動機付けられた一律一斉の体験であっても、そこで得られた高揚感や新たな刺激は、次には個別の主体的な学習としての参加を促し、さらにこうした学生の行動と発言が刺激になって新たな参加者を誘うなど、大学全体に主体的、能動的な学習機運が高まってきた。こうした姿勢は、各種委員会活動などにも影響を与えている。一時は停滞傾向にあった新入生キャンプのコーディネーター、オープンキャンパスや大学祭の実行委員等、各種イベントの推進役を買って出る人材が増加傾向に転じたり、東海道五十三次ウォークやニューリーダー育成研修等も教員主導から学生自身の企画、運営に変わってきたり、学生の人間力の成長が実感される。

保育実践研究センターの子育て支援施設における実践体験型の学習方法は、保育者養成大学の強い関心を得てきた。そのため、保育者養成校間の情報交換会を複数回開催したり、多くの参観者を受け入れたり、具体的な教育計画や学習方法などを積極的に内外に発信してきた。特に類似の施設が時間経過の中で、その創設の意図や目的があいまいになり、維持運営が困難になっている例も多いなかで、本学の子育て支援施設が一貫して学生の学習体験の保障を目的に運営されていることに関する評価は高く、新設校のみならず既設の保育者養成校からの問い合わせも多い。可能な限り、情報開示に努めている。

学内に地域の人々が来、学外に学生が出かけ、1つの目的の元で共に活動することは、地域のネットワークづくりや人間関係作りに有効に働いてきた。保育実践研究センターの子育て支援活動は、すべて「口コミ」で広がったものである。人間関係の希薄化、子育ての孤立化が問題にされる中で、最初の8名の利用者が3年間で600名の利用者を招き入れた実態は、新たなネットワークが着実に広がっていると言えよう。現在では、利用者間に子育ての新たな支えあいと連帯も見られるようになった。これは子育て中の保護者が、支援される側から支援する側に脱皮する兆しであり、本学の「自立と共生」の理念が地域にも波及している実態であると思われる。

地域連携センターの各種の活動は、学生および地域住民にとって、地域の中でのボランティア活動などに役立つのみならず、多様なネットワークや人間関係づくりを可能にしてきた。スタッフは、教員からなる運営委員12名、地域委員8名、ボランティアコーディネーター1名、そして学生実行委員約60名で運営し、学生数は日々増員している現状である。また、小学生、高齢者、在日外国人、障害者などとの交流は、地域の活性化と共に、「安心と安全」の街づくりに貢献している。登下校時に地域の方と挨拶を交わす学生の姿も日常的に見られるようになってきた。

その中でも、高齢者との異世代交流を目指す「バウムクーヘン」事業では「文京の桜を見たい」という地域からの声が届き、そのニーズに応えるために2007年3月末センター主催のお花見会を企画・開催した。地元ふじみ野市に住む65歳以上の高齢者が対象となり、民生委員や老人会のネットワークを生かしながら約100名の高齢者が大学内に集まった。当日は、地域で活動する太鼓クラブや琴サークル、そして大学内の日本舞踊サークルにも依頼し、お茶を飲みながら桜の鑑賞や交流を深めた。また参加者の中には数十年大学周辺に住んでいるが、今回初めて大学内に入ったとの声が多く聞かれた。このように、地域住民への波及効果は大きく「また桜の頃にお花見会を開いてほしい」との恒例化の要望も寄せられている。学生自身も、イベントを企画する意義、啓発の必要性、大変さなど肌で感じたとの意見が寄せられ、本取組は地域貢献への一歩であるとも言えよう。一方では、地域住民を学内に呼ぶだけでなく、実際に学生が定期的に地域の高齢者サロンへと足を運んでいる。下記は一部の感想である。

学生の声

- ・ 戦争の話を知ることができたが、知識不足だったので、よく知っていれば話が膨らんだと思う。
- ・ どう話しかけていいかわからず戸惑ってしまった。沈黙にならないための話のつなぎ。
- ・ 高齢者は思っていたより積極的で元気がよく、ブームを知っていた。

机上では得られないコミュニケーションの難しさ、人との関わり方、個別ニーズの発見等に気づき、体験する機会を設けることで学生自身の学びへと変わっていく。このような体験を繰り返すことによって、事業の計画や運営から始まり実施に至るまで、各種の実践的な能力を高めるだけでなく、地域の人々をつなげる組織化ネットワーキングの力も向上させることに有効に働いている。

学生等の評価

平成18年度「学生生活の関する意識調査」より、本取組主体である3センターがあるふじみ野キャンパ

スの人間学部 578 名のアンケート結果をみると、本取組の目的や主旨が学生にも浸透し、またそれを肯定的に受け止めていることが分かる。「入学前と比較した自分自身の成長」については、1位「視野が広がっていくようだ(70.1%)」、2位「責任感が増した(61.8%)」、3位「自由を楽しんでいる(56.2%)」である。専門的知識を獲得するといった学習の深化に対して、視野の広がりや責任感、多様な人々との交流や実践現場に触れることによって得られた実感に大きく影響していると思われる。また「学部の長所」については、1位「主体となって活動する機会がある(61.6%)」、2位「アットホームな雰囲気である(58.7%)」、3位「社会・地域貢献を積極的にしている(55.4%)」である。現代の学生は他者評価を気にして、流行に敏感に追随する余り自己を埋没させ、新しい世界への一歩が踏み出せないと言われたり、コミュニケーションや課題解決などの人間力が落ちていると言われたりするが、この結果は必ずしもそうではないことを示している。すなわち、本取組のように行政をはじめとした地域の関係諸機関等と緊密な連携体制を組み、地域の人々と多様な異世代交流の機会を与えることによって、学生の人間的成長は大いに期待できるのである。本取組が現代的教育ニーズに対応するための教育プログラムとして有効性を示したものと思われる。

学生の声：実習報告書および観察記録より抜粋

「様々な人と接することで私自身「人」を好きなことに気づき、将来も人と接する仕事に就きたいと思う。」
「学問と現場の違いははとでも多かった。これは現場で実習したからこそ言えることだと思っています。」
「実習の中で今までの日常的な生活の中では気づくことができなかつた自分とはまったく違った環境で生活する人々や働く職員の方の役割を目のあたりにした。」

「今日始めて1ヵ月半のKちゃんを抱っこしました。今までの人生の中でこんなに小さな赤ちゃんを抱っこするのは初めてで、抱かせていただいた瞬間、あたたかさ、やわらかさ、動き、声に感動して思わず涙がこぼれそうでした。実習で使っている人形とは比べもになりませんでした。まだ小さいのに抱かせてくださったお母さんに感謝です。」

「首が座る前の赤ちゃんが寝ていたのでお母さんの許可を得て頭を触らせてもらいました。大泉門が思ったより前方にあるのを発見しました。見てみるとぴくぴく脈打っているのが分かり感動しました。」

「今日は言葉の発達の授業を習ったので、実際の言葉を聞きたくて来ました。」

学外からの評価

大学基準協会の第3者評価において、本取組は、「地域社会の市民と協働し社会福祉の増進を図り、本学における社会福祉教育の充実と本学の教育基本理念である共生社会の実現を目指すために、3センターを中心に、ボランティア養成教育を中心に社会福祉に関わる地域貢献活動(コミュニティ・サービス)を通じた実践的学習(サービス・ラーニング)の推進、地域との新たなネットワーキングの取り組みなどが行われる。この活動は全学的推進体制をとって進められる」と特記され、大学の地域貢献事業として評価されている。

取組終了後の展開

引き続き本取組の主旨にしたがって活動を展開する。

保育実践研究センターでは、正規授業の中で課題探究の視点を広げ、主体的参加の中で実践的に学習する実習教育プログラムをさらに開発研究する。地域の保護者のための子育て支援としては、自主活動への協力をしたり、ニーズに応じて子育て相談を実施する。保育の現任研修としては、幼保両資格取得のための集中講座や現代的課題について大学の専門的資源を活用した公開講座等を実施する。

地域連携センターでは、地域の多様な機関から寄せられるボランティア募集に対し個人レベルで応えるために、個人登録を目指した派遣システムの構築を行う。またニーズ調査で得られた結果を土台に築き上げているつどいの広場事業やまなびの教室では、各々の活動を振り返りや実績を検討する。これにより事業自体の持つ意味を考え、目的の明確化また活動内容とその効果を検証、そして実践現場の提供に結びつける努力を積み重ねサービスラーニングにおける教育課程の研究開発をする。

心理臨床・福祉センターでは、相談業務担当者の再編成を図り、地域相談ニーズ領域の調整と対応を行う。また、同キャンパス内に保健医療技術学部が開設されたため、作業療法学科教育プログラムとの共同研究を導入することによって、新たにリハビリテーション領域を併せ持ち、地域サポートのさらなる充実を図る。